

3 世田谷パブリックシアター

公共劇場は地域社会をどこまで
変えられるか

1. ホールの概要

- 開館年： 1997年
運営母体： (財)世田谷コミュニティ振興
交流財団
- 都市人口： 78万4千人
- 施設全体の延床面積： 9,511㎡
- パブリックシアター： 612席
シアター ترام： 225席
リハ-サル室・練習室： 3室 / 約313㎡
- 管理時間： 9:00 ~ 22:00
休館日： 月曜日、年末年始
- 運営スタッフ総数： 20名
(ただし制作課 + 技術課、非常勤含)
企画系スタッフ数： 5名
芸術普及担当者： 兼務
(企画系スタッフ数、芸術普及担当者数は内数)
- 所在地・連絡先：
〒154-0004 世田谷区太子堂4-1-1
tel. 03-5432-1525
fax. 03-5432-1529

URL: <http://www.setagaya-ac.or.jp/sept/>

2. ホールの特色、事業概要

- 世田谷パブリックシアターは、舞台芸術創造の活動拠点として、世田谷文化生活情報センター内に設置。このセンターは芸術と生活の両面で区民の創作活動を積極的に支援し、日常的な活動を通して、新しい区民文化の創造と区民生活の向上をつなぐ拠点として整備された。
- 世田谷パブリックシアターは、単なる上演施設・イベント施設から脱し、区民のいきいきとした創造拠点であると同時に、すぐれた芸術が継続的に上演される演劇専用劇場という二つの異なっ

た機能を持つ、これまでにない新しいかたちの公共劇場を目指している。

- 主な自主事業(1999年度、後述の芸術普及活動を除く)
 - パブリックシアター：「三人姉妹」、「ザ・マン・フー」、「JAZZ Collection in 三茶」、「ロベルト・ズッコ」、「ネナム」、「狂言ワークショップ」、「コッペリア」等
 - シアター ترام：シンポジウム「90年代のフランス演劇」、ジョセフ・ナジ「ヴォイツェック」、爆笑寄席「てやん亭」、「赤鬼」、「フリーステージ」等
- 自主事業数： 54本(1999年度、共催、提携含む)。
- ホール稼働率：パブリックシアター：81.7%、シアター ترام：87.8%
- 自主事業予算： 3億1,061万円
芸術普及予算： 3,325万円
(学芸系の予算、上記自主事業予算の内数)

3. 芸術普及活動導入の背景、経緯

- 世田谷パブリックシアターでは、美術館の学芸員に倣い、教育普及的な活動を行なう部門として学芸係を設置。公共ホールとしては新しい取り組み。
- 芸術普及事業は、演劇・ダンスに親しんでもらう劇場の演劇・ダンスを活用して一般向け教育普及活動の新しい可能性を探る 専門家を育成する、の3つが目的。
- 海外の劇場を調査し、イギリスの例などを見て、ワークショップや市民参加のクラスなど、いわゆる芝居ではなく、音楽等も組み込んだ市民が親しめる事業をみて、そうしたものを、面的広がりをもたせて取り入れていこうという計画が立案された。
- それは、こうした文化施設が地域の中できちん

*1:英国ロイヤル・ナショナル・シアターは、1976年から1977年にかけてオープンした国立劇場。1980年代はじめに、中規模の劇場での公演をエデュケーション活動が始まり、学校教育のなかの演劇の発展と同時に、エデュケーション活動が徐々に広がりを見せてきた。現在、エデュケーション部は、学校の先生や生徒たちとさまざまなワークショップを行いながら、教室で使える演劇手法を先生に手渡したり、舞台芸術に対する理解を深めたりといった、いわが劇場と学校をつなぐ役割とともに、舞台芸術の観客育成の役割を担う。

と機能するには、公演だけではなく、人が来ることができ、すきまや溜まり場のようなものを用意すべきだという問題意識があったため。特に、社会的弱者、障害を持っている人や子どもなど劇場に普段来ない人たちが集い、演劇に触れることをとおして、新しい地域のコミュニケーションが発見できるしかけづくりの意味合いがあった。

- 学芸系の役割には、ワークショップや芸術普及活動の実施に加え、ここで制作した芝居の中で、公立劇場の役割を果たすもの、新しい社会を見据えられるものを、市民に見せていくということもある。そのためにも、作品の創造に寄与する学芸活動が必要。

4. 芸術普及活動の内容と運営

◎ 芸術普及活動の構成と内容

- 世田谷パブリックシアターは、学芸係を中心に、さまざまな対象に向けたワークショップ事業と、以下のプログラムを実施。
 - 劇場ツアー：一般のお客さんに劇場に親んでもらうことを目的に、ある演目の舞台設備を見てもらったり、照明や音響機器に触れてもらうプログラム。年10回程度開催。
 - ドラマ・リーディング+シンポジウム：日本の演劇界では取り上げられる戯曲に限られていることから、上演の境界線上にある海外の未発表作品を俳優に読んでもらい、上演の可能性を探ったり、観客に知ってもらうプログラム。上演内容に添った演出家や劇作家によるポストトーク、シンポジウムなども開催。年4回、各2ステージ。
 - レクチャー：座学的なものとして、年5～10回でレクチャーを開催。次年度から、学芸スタッフの養成を目的としたゼミを開始する予定。

- 『PT』：演劇関係の専門誌を発行。劇場の活動に即し、かつ幅を広げた特集を組む。年3回発行。

◎ ワークショップ

- ワークショップは、外部の専門家に進行役を依頼し、世田谷パブリックシアターのメンバーが協力する形で実施。それぞれのワークショップは、中長期的な視点から取り組むようにしており、毎年継続的に以下のワークショップ事業が組まれている。
 - 小学生のワークショップ：森や木の物語をベースに、舞台装置や音楽づくりを交えて芝居をつくる。
 - 中学生のワークショップ：中学生自身が既成の物語をベースに台本をつくって上演。
*表参照
 - 障害者のワークショップ：知的障害のある若者を健常者がサポートしながら、ファンタジックな作品をつくる。
 - 地域の物語ワークショップ：写真と演劇、それぞれのメディアを使って、参加者が世田谷取材し、作品づくりを通して、まちを見つめ直すワークショップ。世田谷パブリックシアター（演劇担当）が同じ世田谷文化生活情報センターの中にある「生活工房」（写真担当）と手を組み、それぞれの方法で「地域の物語」を掘り起こす。*表参照
 - プログレッシブ・ワークショップ：英国ロイヤル・ナショナル・シアター（*1）によるワークショップ。*表参照
 - ア・デイ・イン・ザ・シアター：稽古場でやっていることの中から楽しそうなものを厳選、集まったメンバーに応じてプログラムを決める、1日完結のプログラム。
 - ワークショップ こどもの森：夏に劇場で行われる「こどもの劇場」の上演期間にあわせて、子どもたちや親子で参加できる比較



英国ロイヤルナショナルシアター
エデュケーション部による
ワークショップ風景

的短期のワークショップ。

- 戯曲そうぐう: プロの俳優志望者を対象に戯曲を読むことで演技を学ぶ。
 - 演出家のワークショップ: 世田谷パブリックシアターに縁のある演出家(佐藤信、松本修、フレデリック・フィスバックなど)によるプロの俳優向けのワークショップ(ただし、現時点ではプロの育成は学芸系の領域外で、限定的な活動にとどまっている)。
 - その他、年2回、技術課が主催し、学芸係が協力する形で、現場で働く人たちを養成する本格的な講座を開催。
- 最初に実施したワークショップは障害のある人たちとのプログラム。98年度に「デフ・パペットシアター」という聴覚障害者の劇団を招いて、親子向けのプログラムを実施した。
 - 2000年度は2年前に開催して好評だった、イタリアの劇団「テアトロ・キズメット」のエンツォ・トマによる、障害を持つ人が役者として参加するワークショップ。ファシリテーターは「テアトロ・キズメット」の劇団員。さらにパートナーという形で障害者一人一人に日本人の俳優がついて、一対一でワークショップを進めた。
 - 延べ7日間のワークショップで、最終日は成果発表。発表の内容は、ワークショップの積み重ねを並べたものだが、作品といえるほど巧みに演出されており、インパクトのあるものだった。
 - これらは、とてもたいへんなプログラムだったが、それを実施することによって、この施設と地域との広がりが見え入り、障害を持つ子どもたちや支える家族が、どれだけ自分たちの世界から出口を求めているかが実感できるものだった。
- ◎ 劇場の人材と運営
- 世田谷パブリックシアターは演劇づくりの専門家が集まった集団で、演劇を使ったある種錬金術的なノウハウや人脈があってできる部分も大きい。
 - しかし、ものを作るスペースとアイデアのあるスタッフ、予算といった環境が整えば、できることは想像を超えている。建物、スタッフ、ある程度の予算は、質や量は違っても、どこの公共ホールにもあるものなので、必ずやりようがある。
 - 必要なのは、演劇を社会的に役立てていこうという姿勢。演劇というのはこういうこともできるという発想を職員が持っているかどうか重要なポイント。公共ホールの役割というと大げさだが、自分たちがこのホールを使って、地域の文化環境を変えられると思うことである。
 - アウトリーチやワークショップによって、人々や街の中で小さな変化が同時多発的に起こっていく。劇場で働いている人間が一番考えなければいけないのは、そういった小さな変化をどれだけ創り出すことができるかということ。公演の内容も重要だが、公演の先にあるもの、つまりどれだけ演劇が地域に影響を与えるかという面も、同時に考えていくべき。
 - 劇場の持つ戦力によって、断念せざるを得ない部分もあるが、公演はやはり舞台の上と下で対峙してしまう部分もあるので、より日常的な形でダイレクトに人々と関われる芸術普及と2本立てで活動を行うことで、相乗効果が生まれ、芸術環境も変わっていく。
- ◎ 学校との関わり
- 今後、学校と連携した活動を実施していく予定。学校との連携はたいへんな反面、いいものを持っていけば、一番活き活きと息づいてくれる相手先でもある。
 - 学校と連携してワークショップを行う場合、まず、ワークショップを受けたいと思う人がどれだけいるかがひとつの問題。また、芸術普及活動は地道ですぐには効果が出にくいいため、長い目でみると、ワークショップを提供する側がどこまでその体制を維持できるかがもう一つの問題。

「地域の物語ワークショップ」
風景



◎ 主な芸術普及事業の概要

事業の名称(開始年度)	事業の内容(実績は1999年度)、課題や今後の展望				
英国ロイヤル・ナショナル・シアターのワークショップ (1997年度)	<ul style="list-style-type: none"> 英国ロイヤル・ナショナル・シアターのエデュケーション部から連続してワークショップ・リーダーを招いており、99年度はその3年目。「一般」、「プロの俳優」、「先生」と対象を3つに分けて実施。 今後は、ナショナル・シアターのメンバーの短い滞在期間を最大限に利用するため、先生を対象としたワークショップの割合を増やしていく。 実際に現場を持つ指導者に、ナショナル・シアターの手法を伝えていくことを通して、日本の状況にあった活用方法の定着を図るとともに、ナショナル・シアターのメンバーが不在でも、彼らのワークショップを行えるような人材を世田谷に育成する。 例年、参加希望者が多く応募者の需要をまかないきれないというえに、多くのリピーターを生み、さらに進んだ内容のワークショップを望む声も増えている。一方で、予算面やナショナルシアター側のスケジュールの面から、プログラム数を増やすのは、困難な現状がある。 プロの俳優の場合、日本の舞台でその成果を示す機会になかなか恵まれないという悩みがある。 				
	対象	参加者数	実施頻度	参加料	予算規模
	指導者、学校の先生、一般市民	30名	年1回	¥25,000(プロ向け) ¥2,000(一般向け) ¥5,000(先生向け)	271万円
地域の物語 ワークショップ (1998年度)	<ul style="list-style-type: none"> 写真と演劇、それぞれのメディアを使って、参加者が世田谷を取材し、作品づくりを通じて、まちを見つめ直すワークショップ。 前年度は、一人の参加者が「写真」と「演劇」両方を体験するという形式だったが、99年度は、どちらかを選択してもらい、そのメディアを半年かけて、じっくりとつきあってもらったこととした。 演劇班では、取材対象の生の声を一人称の形におこす「聞き書き」という手法を用いて、より豊かで、深い表現が可能になった。地域を取材する事業なので、いい形を探しながら、未長く続けていきたい。 演劇班は、当初より地域在住の演劇団体に協力を求めており、その中から進行役の一角を占める人材が生まれている。また、写真班は、運営委員会のような方法を取り、ワークショップ内容の決定も、参加者と共にするなどしている。より地域に密着させると共に、芸術的に質の高いものにしていく方法論を探していきたい。 期間が長期化することで、より深い取材や作品づくりができるようになった反面、参加者層がある程度限定されてしまうようになった。 「写真班」と「演劇班」が同時並行で進んでいるため、両班の共同作業日や互いの進行状況を見る日を設定したが、参加者は、予想したほどには、もうひとつのメディアに対して関心を抱かなかった。 				
	対象	参加者数	実施頻度	参加料	予算規模
	一般市民	30名	年1回	¥10,000	547万円



「中学生のためのワークショップ」
風景

事業の名称(開始年度)	事業の内容(実績は1999年度)、課題や今後の展望				
中学生のためのワークショップ (1999年度)	<ul style="list-style-type: none"> ● 劇作家・演出家の如月小春氏を進行役に迎え、「星の王子様」を題材に、中学生が自由に発想をふくらませて作品をつくり、発表した。 ● 進行にあたっては、将来演劇や教育関係を志す大学生を対象として、まずワークショップを行い、彼らに中学生をリードする役割を負わせるという二重構造をとった。これによって、大学生の中に、今後のワークショップ・リーダーとなっていく人材を育成することを目的とした。 ● また、美術、音楽、制作なども、中学生と大学生の共同作業で進められ、総合芸術として演劇をとらえたワークショップだった。 ● 中学生として、ワークショップを経験した参加者が、その後大学生としてワークショップをサポートし、将来的には、指導者としてワークショップを進行する。そんな未来像を描いている。 ● 一方で、世田谷パブリックシアターのワークショップの中でも、最も作品づくりに重点を置いたものであり、プロからは生まれ得ない、中学生ならではの、しかも質の高い表現を目指していきたい。 ● 作品づくりを主眼としたワークショップなので、どうしても時間がかかる一方で、中学生の学校行事との兼ね合いから、スケジュール調整が難しい。実施機会が絞られる中で、多数の参加希望が予想されるリピーターと新規参加希望者のバランスをどのようにしていくか、中学卒業生をどうしていくか、といった問題がある。 				
	対象	参加者数	実施頻度	参加料	予算規模
	中学生	23名	年1回	¥ 5,000	235万円

- 99年度の「英国ロイヤル・ナショナル・シアター」ワークショップでは、学校との連携を強化して、区内の小学校研究会の先生を対象に、番外でワークショップを実施、さらに区内の小学校に赴いて、実際に授業の中でワークショップを行った。
- 英国ロイヤル・ナショナル・シアターのメンバーからは、学校の先生が総合的に演劇を理解できるようなものを作ったほうがいいという提案があった。例えば、先生が劇場に1週間通って、午前中に劇場の各部門の人に話を聞くようにすれば、劇場のしくみが理解できる。その上で、プロセスを踏んだワークショップを受けて、芝居も見るといった一週間のプログラムを用意し、演劇というものを理解してもらってから、学校との関係づくりを行うべきではないかというような内容。

5. 芸術普及活動の位置づけと課題

- ◎ 社会における演劇(芸術)の位置づけ
 - 芸術普及活動は、もとより時間を必要とするもので、地道な作業の積み重ねを繰り返していく以外にはない。何より、普及していく「芸術」そのものの質を向上させていくのが一番の近道。
 - 芸術普及活動の継続の効果は出ている。ワークショップでも、1回目より2回目のほうがうまくいき、劇団や劇作家とのコミュニケーションもスムーズになった。そういった意味で確実にあるステージがあがってきたという実感がある。
 - しかし、演劇人として突破しなければならぬ壁もある。かつて演劇は社会にとって大きなインパクトがあるものだった。今は、文化での地域活性

化というお題目があって、演劇はそれを満たすための一つのオプションとなってしまう。

- それををうち破るのはたいへんだが、やはり芸術は社会とともに動いていくものであり、社会が変化するときにはリアクションをしなければならない。今、劇場はそういった回路が持ちづらくなっている。
- 劇場は、芸術に関わるものであり、無色透明というわけにはいかない。子ども向けの普及活動をやっているだけではいいというわけではなく、作品によって、劇場として社会に何を提供できるかを示していくなど、どこかでその劇場の色を出す必要があるだろう。

◎ 演劇をめぐる日本の芸術環境

- 日本で、ヨーロッパの劇場文化が、そのまま成り立つわけではない。日本の場合は、もう少し大衆的な広がり意識していく必要がある。
- ヨーロッパの優れた劇場と比較した場合、優れた芸術監督が行政から明確な役割を与えられ、それに答える形で方向性を出し、スタッフとともに実現していく。その結果、劇場を中心に、地域の文化環境が変わっていくという状況があるが、それと比べると今の世田谷パブリックシアターは、まだまだ劇場としての凝縮感がない。
- 日本の場合も、演劇を社会に向けて打ち出していくときに、芸術監督をヘッドに、劇場のスタッフが個々の役割を担いながら、一丸となって取り組む体制を整備していく必要がある。

◎ ファシリテーターの育成

- 今の日本では、ワークショップを行う側、つまりファシリテーターに演劇経験が浅い人が多いことも課題。個人の精神的な成長を支えるというファシリテーター役割を担える人材が少ない。
- またファシリテーターには、演劇というものがここまでできるという基本的な認識を持ったうえで、

その具体的な活動としてエデュケーションを実行していこうという強い意思が必要。

- したがって、ファシリテーターの育成が必須であるし、学校との接点を考えると、先生の演劇体験を増やしていく活動が必要。今後、ナショナルシアターと手を組んで、学校の先生を含む人材育成に、長期的に取り組んでいきたい。

◎ 世田谷パブリックシアターにおける課題と今後の展望

- 市民や地域との結びつきの新しい試みとして、「世田谷パブリックシアター大感謝祭」があげられる。これは年度はじめに、市民や演劇人に対して、一年間のスケジュールを発表し、話し合う企画で、個々の事業単位ではなく、年間を通じた劇場活動への理解を促進するものである。
- 毎年恒例の大道芸のフェスティバル「世田谷アートタウン」も、芸術を劇場の外へ出す催しとして、芸術普及の第一歩と位置づけている。
- 予算の問題を除いても、公立施設としては、運営ボランティアや市民参加の考え方を導入していくのは、必須の流れ。
- 芸術普及の主旨からも、学校への出前事業など、教育・学習機関、他の文化施設との連携も必然だろう。ただ、芸術活動は、そうした社会環境を無視しては成り立たないが、同時に、社会環境の変化にとらわれることなく、自立した価値基準を育むことも、芸術の大切な役割。時代の流れに惑わされることなく、公立劇場としてじっくり芸術普及活動に励んでいく姿勢が重要。